
宇宙伝説～怪奇の章～

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙伝説〜怪奇の章〜

【Nコード】

N4720A

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

都市伝説をもじった、宇宙伝説です。短編ホラー集をお楽しみください

soul1: 幸せ？

今日は平日。

僕はさほど広いわけではない家の庭で、4歳と3歳になる2人の愛娘が遊んでいる姿を静かに見守っていた。

2人とも大切な自分の子供だ。見てみると心が和むし、とても安らぐ、幸せだ。なにかあった時は、父親である僕が2人を守ってやらなくてはいつも思う。

突然、なんの前触れもなく、ポツポツと雨が降り出してきた。庭で遊んでいた娘達は急いで家の中に入る。

妻は家のなかでなにやらやっている。洗濯物が干しっぱなしだ。はやく入れなくては、濡れてしまう。僕は急いで洗濯物を取り込もうとする。

妻はなにか泣いているようだ。どうやらいつも泣いているらしい。僕にはなぜ泣いているのか分からない。幸せな家庭に娘が2人、僕も仕事にいく必要もなく毎日、家にいることができ、とても幸せなはずなのに…。

雨はより一層激しく降る。はやく洗濯物を入れなくては。

家のなかに入った4歳の娘が泣いている妻に向かって一言、言った。

「ねえママ、どうしてパパは死んじゃったの？」

雨に濡れることのない僕の手は、いつまでも濡れている洗濯物を取り込まれずにいた。

soul2：見えていたもの……

僕は大学でサッカーのサークルに入っている。練習が終わると毎日同じ駅から電車に乗り一人暮らしの自分のアパートに帰る。いつものことだ。

その日僕はいつもより練習が終わるのが遅くなってしまった。とはいえいつもより1時間ほど遅くなってしまったただけなんだが……。時間は夜10時が過ぎたところだった。

いつものように大学の最寄りの駅から電車に乗り、家に向かって帰りはじめた。

この電車はいつものことながら、何故こんなところを通るのか不思議に思う場所を通る。それは神社の境内を通るのだ。わざわざこんな場所を通らなくてもと思うのだがいつものことなので、少しも気にはならなかった。

僕はいつも座席に座らない、特に理由はないがただなんとなく。だから僕は、いつもドアに寄りかかって外を眺めている。それもいつものことだ。

そしていつものように神社の境内を通る。ここはいつも暗い、街灯もなく、神社特有の重々しさを放っている。

電車が神社の境内を抜けようとした時、ふと目の前を青白い光のようなものが通り過ぎた。驚いた僕は、今通り過ぎた神社のほうを見る。なにもない……。当然だ。なにかあるはずがない。気のせいに決まっている。

夜遅くに僕はアパートに着いた。もう11時も過ぎている。あまり家具のおいていないこの部屋にはテレビとテーブルがあるだけ後は備え付けの冷蔵庫と、電話がおいてあった。電話は基本的には使わ

ない。携帯電話もあるし、学生の僕にはまず必要ない。その証拠になることなんてほとんどない。

- - - プルルルルップルルルルッ - - -

突然備え付けの電話がなった。この電話はほとんど鳴ることはない。でもいつもセールの電話くらいなものだ。だから鳴っても出ることもほとんどない。でも今日は違った。何故か電話に出てしまった。まるで電話に吸い寄せられるように……。

>ヒュー！ガタンッゴトンッガタンッゴトンッ……………プツ<

切れた。受話器の奥からは電車の走る音が聞こえた。だれかが線路の近くからかけてきたのだろうか？

- - - プルルルルップルルルルッ - - -

また電話が鳴った。さっきの人かな？と思った僕はまた電話をとった。

>ヒュー！ガタンッゴトンッガタンッゴトンッ……………ドゴッ
！……！……プツ<

切れた。受話器の奥からはまた電車の走る音が聞こえた。けど今度はその後になにかがぶつかったような鈍い音がした。さすがに気味が悪くなった僕は電話のコードを抜いた。これで大丈夫なはずだ。

- - - ピピピピピッピピピピッ - - -

身体が一瞬固まった。今度は携帯電話が鳴った。表示を見てみると

友達からだった。僕は少し安心して電話に出た。

>ヒューー！ガタンツゴトンツ…はずでしょ…ドゴッ！…！…プツ<

受話器の奥から聞こえてきたのは友達の声ではなかった。また電車が走る音…。しかもよく聞き取れなかったがなにか言っている。しかし、さすがに気味が悪くなった僕は電話のコードを抜いた。これで大丈夫なはずだ。

- - - ピピピピピピッピピピピッ - - -

身体が一瞬固まった。

今度は携帯電話が鳴った。表示を見てみると友達からだった。僕は少し安心して電話に出た。

>ヒューー！ガタンツゴトンツ…はずでしょ…ドゴッ！…！…プツ<

受話器の奥から聞こえてきたのは友達の声ではなかった。また電車が走る音…。しかもよく聞き取れなかったがなにか言っている。

しかし、気味が悪い。一体この電話はなんなんだろう？。イタズラ電話にしても手が込みすぎている。しかもこんな時間に…。僕はもう電話が鳴らないように携帯電話の電源を切り、気分直しにテレビをつけた。

>ザー - - - - - <

テレビには砂嵐が映っているだけ、時間も遅いし、もうテレビ番組は全部終わったのだろうか？。しかしよく聞くとなにかがテレビのスピーカーから聞こえる。

>ザー…、ヒューー！ガタンツゴトンツ…見えていたはずでしょ…ド

ゴンツッ！！！！<

僕は思わずテレビの電源を切った。しかし、はつきり聞こえた。そして全て理解できた。

そうだ……。僕は見えていたんだ。電車が神社の境内を通り過ぎようとした瞬間：顔が判別できないくらいに潰された子供の姿を……。ただ僕は、気が付かないフリをしていただけ。見えていたんだ……。

翌朝、僕は子供の姿が見えた場所に花を添えにいった。これは後で知ったことなんだが、2日前にこの場所で七歳の少年が電車にひかれ死亡したそうだ。時間は昨日、僕が乗った時間の電車。顔は判別できないくらい潰されていたらしい……。

そしてその日から奇妙な電話はかかってこなくなった。

きつとあの少年は寂しかったんだろう。

そして見えていたのに見えていないフリをした僕に怒っていたのかもしれない……。

今日もまた、いつものように電車は神社の境内を静かに通りすぎて行った。

soul2：見えていたもの……（後書き）

この話、実は一部実話が含まれています。神社の境内を通る電車はほんとにあります。なぜあんなところを通るのか不思議なのですが、ほんとに通っているのです

soul3：地獄への電話

僕の通っている学校では変な噂が流れている。それは地獄に繋がる電話番号があるらしいと言うこと。その番号は、

> 090 - 0000 - 0000 <

まったく馬鹿げているとしか言いようがない。こんな噂を信じている人達がこの学校にはたくさんいる。噂は所詮、噂でしかない。この噂もだれかが流したものだろう。

というか、実はこの噂を流したのは僕自身である。なぜこんな噂を流したかと言うと面白そうだったから、ただそれだけの理由だ。しかも僕が流した噂は地獄に繋がる電話番号があると言っただけ。番号なんか一言も言っていない。いつのまにか付け足されている。作り話がいつのまにか広がり、勝手に増強して噂になる。まるで生き物のように…。

この手の噂は広がると次に付け足される噂はだいたい予想できる。たぶん、この番号にかけた人が死んだとかそういうのだろう。

「なあ優斗、例の地獄に繋がる電話にかけたやつが死んだらしいぜ」

優斗と言うのは僕の名前だ。

その日、僕は友達の信二と一緒に学校が終わったあとカラオケに行っていた。カラオケを楽しんだあと帰り道で信二が噂の話をしてきた。

「へえ、そうなんだ」

僕は、軽く聞き流そうとしたが信二は話を止めなかった。

「死人が出たってことはあの噂は本当だったってことだよな！」

信二は少し興奮気味だ。

本当なわけがない、僕が作った作り話だ。

死人が出たという話が付け足されるのも予想していた。

帰り道、時間はちょうど深夜0時を過ぎたところ。この辺りは街灯もほとんどなく暗い道だ。空には三日月が顔を覗かせている。

「なあ優斗！おれたちもかけてみないか！？」

信二はこんな時間なのに妙に興奮している。カラオケでテンションがあがって抑えられなくなっているのかも知れない。

僕は話を作った張本人だからこの噂が嘘なのは知っていたが、せっかくここまで大きくなった噂だ。僕は信二の話に合わせることにした。

「おっ！いいね！面白そうじゃん！かけてみよっか？」

「おっし！かけようぜ！あつ、でもおれは怖いから優斗がかけて」

「なんだよ…。信二、自分から言つといて…根性なしか？」

「まあそう言うなって。優斗がかけた後、おれに代わってくれればいいからさ」

「まあ僕は別に構わないけどさ…」

僕は、信二の頼みで例の番号にかけることになった。存在しない番号に…。

ピッピッピッ…。

ブルルルルッブルルルルッ…。

やはりかかるはずがない。まあ分かりきっていたことだが。

ブルルルルッブルルルルッ…ガチャ。

「？」

電話が繋がった。僕は予想外の事態に一瞬戸惑った。

>……………<

だが、なにも聞こえない。

>うつ…うわあああああ！！<

「！！」

男の叫び声が聞こえた…。

>たっ！助けてくれえ！たすげでぐれえ！！！！<

その声はまさに地獄から聞こえてきたような声だった。僕は背筋が凍りつき固まってしまった。

「おい！優斗！なんか聞こえたか？おれにも代われよ！」

そう言つて信二は僕の携帯電話を横取りした。

「あ！やめろ信二！！」

僕が止めるのも聞かず信二は携帯を耳にあてた。

>…は、現在使われておりません。もう一度、番号をお確かめのうえ、お掛け直し下さい<

「……、なんだ。使われていないだつてさ。やっぱり噂は噂だつたみたいだな」

そう言つて信二は携帯を切った。

信二から携帯を返してもらつた僕は信二に不思議そうにたずねた。

「なにも聞こえなかったのか？」

「聞こえたよ。現在この番号は使われておりませんって、それがどうかしたのか？」

信二も不思議そうに聞いてくる。

僕は答えようがなかった。

その後すこし行ったところで帰り道が違つので僕は信二と別れ、一

人で夜道を歩いていた。あいかわらず空には三日月が出ている。この辺りも街灯は少なく暗い道だった。さっきのこともあってか。いつも帰っているこの道も不気味に見える。

さっきのはなんだったのか。幻聴だったのかも知れない…。第一この噂を作ったのは僕だ。けど、番号は誰が付け足したんだ？。この暗い夜道を帰っているとそんな不安と恐怖に押しつぶされそうになる
プルルルルッ

突然電話がなった。僕は鳥肌が立つほどビクリしてしまった。携帯の画面を見ると非通知でかかってきたみたいだ。こんな夜中にいたい誰が。もしかしたら信二かも知れない。僕をビクリさせてやろうとわざわざ非通知でかけてきたのかも…。
そう思った僕は電話にでた。

>……………<

なにも聞こえない。

「し…、信二？」

>…な…、なんで……………なんで助けてくれなかったんだ？<

+++++

「ねえ、聞いたあ？また例の地獄の番号にかけた人が死んだらしいよ」

「あ！知ってる。確かアレでしょ？地獄の番号に夜中の0時頃にかけると繋がるんでしょ？」

「そうそう！それでその後、非通知でかかってくるらしいよ。で、その電話にでると地獄に連れて行かれるらしいね」

噂は増強する。まるで生き物のように…。

でも、その噂はほんとに噂？あなたが聞いたその噂は真実の出来事なのかも知れない。

ブルルルルッ！

soul3：地獄への電話（後書き）

どうだったでしょうか？感想など頂けると幸いです

s o u l 4 : 会いたかったんだ (前書き)

最終話です。

soul4：会いたかったんだ

おれの名前は赤坂良平。

おれは、田斉愛美という女の子と付き合っている。

おれにはいつも連んでいる親友の府中和吉というのがいる。

もう1人小さい頃からの幼なじみの女の子栗木真由というのがいる。親友の府中はおれの恋人の愛美とも友達だ。幼なじみの栗木も愛美とは友達だった。でも府中は栗木のことは知らなかった。

あの日、愛美の葬式で会うまでは…。

愛美は交通事故に遭い、その生涯を終えた。葬式でおれは悲しみに胸が押しつぶされそうになっていた。そこに親友の府中が話かけてきた。

「なあ、あの子可愛くない？」

人の気も知らないでなにを言っているんだコイツはと思いながらも府中が指差したほうを見た。

そこには、幼なじみの栗木が立っていた。

「ああ、あいつはおれの幼なじみの栗木真由だよ」

「なんだよ、お前あんな可愛い子と幼なじみなのか？なんで紹介してくれなかったんだよ？」

「なんでって…、別に、ってかお前いま葬式の最中だぞ」

「それもそうだけど…もしかしたらおれ一目惚れしちゃったのかも」
コイツ…、つい先日恋人を亡くした友達の前でするかと思っていたが悲しみのあまりそんなことを口にすることもできずに葬式は終わった。

「赤坂…、お前今夜どうするんだ？」

「おれは今夜ここに残るよ、もう少し愛美と一緒にいたい」

「そっか、じゃあおれは帰るからな。お疲れさま」

なんか今日の府中は無神経だな。もしかしたらあいつは愛美が死んだ悲しみを表に出さないように無理して元気なように振る舞ってる

のかもな。
ダメだなおれは…。

2ヶ月後

「赤坂、あの子元気？」

「えっ？」

「ほら、お前の幼なじみの栗木真由つて子」

「ああ、さあね、あの葬式の日以来会ってないからな。なかなか忙しい子だから」

「そうなのか？おれも会いたいのになあ」

「忙しい子だから難しいかもな」

「彼氏はあるのかな？」

「確か…いないみたいなこと言ってたような」

「じゃあチャンスだね。なんとか会えないかな」

「お前、すごい気に入ったみたいだな」

「うん、まあね」

10日後

「赤坂君、なんで死んじやったの？」

「幼なじみの栗木が言った。」

「彼、殺されたみたいだよ」

「あなたは？」

「おれはあいつの親友の府中つて言います」

「赤坂の葬式で約2ヶ月ぶりに府中は栗木と会っていた。はじめての会話だった。」

「君に会いたかったんだ。はじめてみた時から一目惚れだった」

「やめて、赤坂君の葬式の最中よ」

「いいから、聞いて。彼から君のことは聞いてた。すごく忙しくて

大変みたいだつて」

「でも僕は君に会いたかつたんだ。だから必死で考えたよ。君に会える方法を」

「やつといい手が浮かんだった。結果は予想通り君にまた会うことができた」

「え？どういうこと？」

「赤坂にも相談したんだ。君に会うためにおれが考えた方法の意見がほしくて」

「あいつは笑つてたよ。冗談だと思つたんだろうね」

「でも僕は本気で君に会いたかつたんだ。だから実行したよ。君に会うために」

「赤坂のやつ、あまりの恐怖に顔がすごい引きつっていたよ」

「親友なんだからこのくらいこと素直に協力してくれればいいのに」

「あいつは抵抗したから、無理やり……」

「ちよつとまつて、どういうことなの？意味がわからないんだけど」

「分からない？君に会うためにあいつを殺したんだよ。僕は」

「え……」

「君は忙しいらしいからさ。友達とかが死んで葬式やることになれば君に会えると思つて」

「だから赤坂には協力してもらつたんだ。ちよつと無理やりになつただけ」

「あいつが死んでくれたおかげで君に会えたよ。感謝しなきゃね」

「一緒に暮らそう……真由」

赤坂の協力を無駄にしないために……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4720a/>

宇宙伝説～怪奇の章～

2010年10月21日20時13分発行